



〈資料〉貨幣の価値 : リーフマン『貨幣と金』第六章 (1)

リーフマン[著]
谷田, 義一(譯)

(Citation)

経済學商業學國民經濟雜誌, 33(6):949-960

(Issue Date)

1922-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053507>



貨幣の價值（其二）

（リーフマン『貨幣と金』第六章）

谷田義一

價值學説は、凡て從來の見解に従へば、全經濟論の中心に立ち諸流派の主要なる論争點となり、主要なる對立となつて居る如くにまた貨幣價值の問題は貨幣論に於ける凡ての貨幣問題の要點であり、其の諸流派を別つ究極的目標である。既に一般價值概念に就ては、其れが假令主觀論であつても、客觀論であつても、凡て從來の理論の主要なる誤謬の一として、價值と價格との混同が含まれて居るのであるが、之と同じく貨幣價值の問題に就ても一切の論争の問題は此の根本的な誤謬に附着して居るのである。

夙にアリストテレスは貨幣論上の主要問題が貨幣は法制より發するか自然より發するかに在

ることを喝破して居る。此の基本問題は形態を變化して今日に至るまで貨幣論を支配し、輓近貨幣論に於ては、其の中心に立つて居る價值理論の如何によつて金屬主義的貨幣學説と章券貨幣學説との對立となつて現はれた。前者に據れば、貨幣價值は貨幣が之れに基て呼ばれねばならぬ所の評價素材、即ち今日は原則として金、から發するものとして居る。後者に従へば、貨幣は法から發するのであつて、即ち章券學説の主要なる代表者であるクナップ（G. E. Knapp）の如きは、貨幣を以て「法制の所産」と言つて居る。併しながら實際クナップの見解の如き章券の見解は最早其の發達の頂上に到達したのであるが、彼の唱道したる所は毫も經濟的貨幣學説ではなくして單に貨幣國定學説であるから其れはクナップが名目的貨幣論と名附けて居る所の貨幣論の廣汎なる概念の一の亞流に外ならぬのである。名目的貨幣理論に於ては貨幣價值は貨幣素材の價值より起るのではなくして（之れ

名目主義が凡ての場合に於て金屬主義の反對論たる所以)之を以て購買することの出来る財より傳導せられるのである。夙にアダム・スミスは此の原則を喝破したが、彼は當時却て金屬主義貨幣論に到達したのであり、尙今日と雖も殊更多數の貨幣論上の折衷論者は之を金屬主義的見解、または章券的見解と混同して居るのである。純名目的貨幣理論はクナツプの章券學說の如くに、貨幣を國家または法制に歸せしめない限りは、指圖學說と名附けることが出来る(茲に指圖とは既説したるが如く法的請求權の證券化の如き特殊の法的意義に解せらるべきものでなく、單に支拂の豫望即ち見込と同一意義を示す最も一般的意味と解せらる)此の學說は貨幣は單に符號、指圖、價值表彰其他の種々の名稱が意味する所を認むるものであり、從て其の代表者は貨幣價值に就ても著しく異つた見解を有つて居る。

茲に吾人は章券學說とは單にクナツプ及び彼の祖述者が貨幣價值を法律、即ち法制に歸せし

めて居る所の學說と解したい。何となれば章券(Charta)とは單に符號のみではなく法律をも意味して居るからである。また吾人は貨幣價值、または其の購買力を評價素材に歸せしめない所の一切の學說を名目學說と名附けむと欲する。故に吾人の理論も勿論一の名目學說であるが、其れは未だ從來の一つまたは他の學說の代表とは言はれない。即ち其の關する所は理論附如何に在る。吾人は名目的見解の古い理論附企てを指圖學說の下に總括せむことを欲する。何となれば其れは孰れも現實的支拂用具のみを以て貨幣なりと考察する點に於て、吾人の名目的貨幣理論と區別せられるからである

夙に指圖學說は種々の要式に於てロウ。ペテイー。ロック。モンテスキュー其他多數の學者によつて代表せられたのであるが、最近の貨幣論に於て此の中に算入せらるべきはオット・ハイン(O. Heyn)が居る。併し此の指圖學說が多く祖述者を見出し得なかつたのであるが、

其れは現に吾々に明かである様に指圖學說が數量的、唯物的基礎に立つて居る所の傳統的經濟理論の體系、即ち現在の財學に適合せなかつたと言ふ譯ではない。吾人が指圖學說に到達したのは全く事實關係の觀察に基いて之を理論附けむと企てたる結果であつて、從て特殊なる貨幣學說に逢着して居るのである。併しながら此の名目的貨幣理論と一般的貨幣理論との融合は到底不可能であつた。茲に於て吾人は専門的に貨幣學者ではなく、貨幣を一般的經濟理論の範疇に於て考察せむとする所の經濟學者、例へば殊に最近フォン・ヅキーザー (v. Wieser) の著社會經濟學原理 (Grundriss der Sozialökonomik, Band I.) に於て、吾人は名目的貨幣見解と其他の部分に於ける唯物的經濟理論との間に特徴的な矛盾を見出すのである。

輓近に於ける多數の貨幣學者も亦た一般經濟理論の不滿なる狀態に基き説明せられて居る折衷論に傾いて居るが、貨幣現象の眞の説明に至

つては之を閑却して居るのである。斯かる説明は貨幣を經濟全體のの極究の基礎に、即ち個人の欲望に結びつけねばならぬのであつて、之よりして凡ての交換經濟的特出物と同じく貨幣を組織的に説明附けねばならぬ譯である。ヘルフエリヒ (H. Helfferich) の著作も亦た此の折衷的文獻に屬するのであつて、吾人は貨幣理論の個々の點に於ては、其の卓越したる研究によりて本書に負ふ所あるも、貨幣の一般理論的理解に於て取るべき所なきは一般經濟理論の不明確なる故である。

一 名目主義

金屬主義の見解は今日尙は全く優勢なる地位を占めて居る。此の見解が交換取引現象を財の數量間の關係として説明附けむとする所の財學としての在來の技術的、唯物的經濟理論と全然合致することはまた容易に洞察することが出来る。同様に此の見解は價值と價格との混同の結

果、素材價值とまた職能價值とを問はず、一の絶對價值を信ずる今日の價值學說とも一致するのである。此の價值學說は一切の財の價值に就て、經濟生活上に於ける客觀的表現を信じたるが如く、また貨幣價值を問題として自然其の根底をなす貴金屬、即ち金に於て貨幣價值を見出した。此の金屬主義的見解のみが在來の經濟理論に適合するのであるが名目主義的見解は之に適合するものではないことは敢て疑を容れぬ所である。

併し名目主義の代表者の内には、殊にオットー・ハインは一般經濟理論を改善すべく微弱ながらその試みをなした。唯ハインも價值概念に關して一般的の説明から到底離脱することが出来なかつたため彼は之の名目主義的貨幣見解の理論的基礎附には到達することが出来なかつたのである (Theorie des Wirtschaftlichen)¹⁾ 故に他の名目主義者は經濟理論によりて自分の見解を支持するとの根底を放棄したるか、若しくは貨幣

理論を一般經濟理論から切離して樹立することが出来るものと信じたのである。是れクナツプの貨幣國定說に於て殊に然る所であり、從て其れは高々貨幣の法律的説明に過ぎざる可く經濟的説明ではない。此の事はまた彼の祖述者であるペンデイクセン (E. Bendixen) の研究にも當徴る。彼は貨幣の經濟理論はクナツプが中止したる點より始まるとなし、而も國定學說は貨幣の基礎理論であつて、之れに關して爭のなきことは恰も九々算に於けるが如くであり、從て貨幣國定學說は満足なる貨幣の經濟的理論に矛盾するものではなく、否却て其の根底をなすものと考えて居るのである。

之れ確かに正當ではない。クナツプも其他の名目主義的見解の代表者と全く同じく貨幣の固有本質と内部經濟的職能を閑却したのである。從て彼は其の理論の經濟的基礎附に於て詳細なる穿鑿をなすことなくして、寧ろ彼の名目主義的見解の誤りたる經濟理論を置き、之に據れば

貨幣は法制の所産であり、從て貨幣とは如何なるものであるか、貨幣は何物として通用すべきかは國家が定めるのであり、故に素材的に無價值なる如何なるものに貨幣の性質を賦與するかを決するは、單に國家權力なることを主張することによりて貨幣の價值は價值ある素材に結合するものでないとなすのである。クナツプが此の見解に到達したのは犀利なる觀察者としてであつて、彼が事實關係、特に奧太利の貨幣制度の觀察より貨幣の章券的特性を導き、斯くて金屬主義の否定に到達せねばならなかつた結論は在來の經濟理論とは一致せないことはまた彼自から感じた所である。クナツプは單に事實關係の觀察から此の認識を汲み取り、其他の理論的見解に於ては依然として傳統的唯物的經濟觀の根底に坐したるため、此の認識に到達することは彼に取つて如何に至難であつたかは、次の章句に據つて明かである。

『名目的價值單位が財の支拂用具的價值（即ち

一定の交換用具によりて表現せられて居る所の價值）の判斷に全く當蔽ることを承認するは余の内心久しく矛盾となつて居つた。其れは殆ど凡ての人の誤謬であり、また余の誤謬でもあつた。何となれば余は價值判斷は財とが比較せられたる時に就て起るものと考へて居たからである。所が今單に主張し得る所は最初の價值判斷が斯くして起つたと言ふに過ぎない。若し此の種の判斷が出来上つてしまへば、最早直接に財と財とを比較することは必要ではない。然る時には名目的、單に歴史的に確定せられて居る價值單位を用ゐて財に對して價值判斷が賦與せられ得るのである』(a. a. O. S. 13)

人、若し「經濟する」(Wirtschaften)とは必ずしも財の獲得ではなく利用と費用との比較、即ち或る心理的のものであることを夙に認識して居たなれば、茲に財と財とを比較することは全然起らないのであり、少くとも數量的に之を比較するのではないのであつて、快、若しくは不

快の感を比較するのであることを疾に會得したのであらう（人の識る如く貨幣的表現即ち價格を茲に「賦與せられたる價值判斷」(abgegebene Werturteile) と考へるのもまた根本的誤謬である。若し價格が表示せられた價值判斷とするならば、一の財を購買する凡ての人は之を同様に評價して居る筈である。クナツプの如き犀利の頭腦を以てかく平易なる原則を認めなかつたとは不思議である）。不快の感は費用として利用獲得に唯、間接に役立つ所のものに附隨し、從て抽象的計算單位にも、其れが一般に受取られて交換取引上、享樂財の獲得の安全が保證せらるる限り、之にも附隨して居るのである。貨濟の購買力は唯、此の享樂財の獲得に依繫して居るのであつて、如何なる素材的特性にも依繫して居るのではない。

斯くしてクナツプが彼の著作の劈頭に於て貨幣を法制の所産と名附けたの勿論不正當であつて、偏頗な歴史的、歸納的考察に追從して、組織的、理論的基礎附を缺除して居るのである。何となれば本來の貨幣であり、貨幣の經濟的本

質たるものは、取りも直さず、國家が造出するのではない計算單位としての貨幣の内部經濟的及交換的職能であるからである。國家は既存の計算單位を名稱附け、此の計算單位は如何にして外的貨幣に於ける形態を取るべきかを確定し百三十九箇二分の一が一封の金に相當して居る所の金貨の十分の一を『マルク』と名稱附くることを決定するのであるが、併し此の計算單位が如何に通用すべきか、其れが財に對する評價即ち其の購買力を決定するものではない。此の購買力は一方に於て所得と價格の關係によつて決定せられ、他方に於て之を以て欲望充足上到達せらるるものによつて決定せられる。財の量を購買するのは貨幣ではなくして、計算單位に於て現はされて居る所の所得である。此の計算的所得が果して金屬貨幣、銀行券又は手形、配當證券等の孰れに於て成立して居るかは問ふ所ではない。欲望充足に當つて消費せらるるのは貨幣ではなく所得である（實に消費者の大部分

の購買は今日既に貨幣なくして行はれて居る。貨幣の個数が費用財たるに非らずして、單に計算單位の幾倍かが費用財である。所得とは貨幣の額ではなくして、唯計算單位（即ち、貨幣も之れを以て呼ばれて居る所の分母）に於て現はされて居る所の額であつて、之れが各個人經濟に於て利用し及費用の比較の基礎となり、其れよりして、全交換取引に於ては再び價格に導かれて居るのである。

戰時中、貨幣制度の發展によりて名目的貨幣見解は實に一層の強みを得て來たのである。而も之に對するクナツアの法的理論附に至つては然うではない。殊に瑞典及びアルゼンチンに於ては發券銀行が最早金を受取ることを欲しなかつたために銀行券は金に對し『開き』を生じたのであるが、此の事實は金屬主義者に取つて一考に値する所である。之れを精細に檢すれば、實に名目主義は一の論理的自明論であるが、今尙は此の見解の經濟理論的基礎附は全く缺けて

居て、之れは到底一の唯物的體系に於ては不可能なる所である。また、それ故に今日の經濟理論の主たる代表者は金屬主義の見解を固持して居るのである。之れを明かにするために余は一の代表的な意見を掲げようと思ふ。カール・デール (Karl Dietl) は言ふ。

『クナツアは貨幣は一國の對内取引に於て、素材價值がなくとも可能であると主張して居る。然るに事實上我が獨逸貨幣は全然無素材價值的ではない。即ち其れは悉く現實的金屬貨幣に基礎して居る所の貨幣代用物に關する所である金屬主義者は單に金本位自身が維持せられて居る時は廣汎なる範圍に互つて、貨幣の代用具が可能であることを争つたのではない！。我が戰時貨幣狀態は毫もクナツアの學說に有利にして金屬主義學說に不利なる證據となるのではなく、圓滑なる經濟取引は素材價值を有つ貨幣の必要なることは依然として存する所である！。生産が任意に商品を市

場に投ずる所の個々の私人に委ねられて居る限りは(？)、茲に價值比較用具が存在せねばならぬ(貨幣と價值を以て交換者の間に於ける交換物の價值の比較用具であるとは面白いな誤謬である)。生産者は購買を望む消費者に向つて「今、汝は我が商品に對して何程を與えむと欲するかを一般に好まれて居る所の物、例へば金を以て評價せよ」と求むることが出来ねばならぬ」。(Deutschland als gesellensener Handelsstaat im Weltkrieg, Stuttgart 1916, S. 20.)

此の最後の章句は正鵠を得て居らないこと、即ち何人と雖も受領する商品に對して何程を與ふるかを金に基て評價するものに非らざること、就ては最早論議する必要はない。併し更に金屬本位貨のみが貨幣であつて、凡て其他のものは單に貨幣代用物であると主張するのは言葉の争に過ぎぬのである。其の購買力が金屬貨幣の購買力から全く獨立せる不換紙幣が存在して居

ること、及び多數の國家は金屬本位を固持せず斯る純紙幣本位を永く保持し來り、また、中には今日尙ほ之れを保持し、また弊害なく永續的に保持し得たものも有るこの争ふことの出来ない事實は經濟理論に於て、之を説明附けねばならぬ。併し利用と稀少性に基く所の價值概念を打ち樹て、之れに據つて財の價值の一般的尺度を見出し、また之れに據つて價值ある素材に具體化せられて居る所の貨幣の一般的尺度を見出し得たものと考へて居る唯物的經濟理論は此の説明附を遂たすことは出来ぬのである。その説明附は財の生産及素材の獲得及び素材の消費とは何等の交渉を持つて居らぬ所の經濟の本質と個人經濟に於ける貨幣の職能を合理的に認識するによりて唯可能となるのである。

併し吾人は本題に歸つて章券學說に就て論ぜよう。正當なる經濟理論の缺除して居るために此の經濟理論に據つては貨幣價值が素材から獨立して居るとの歸納的に得たる認識を基礎附く

ることは出来ない。貨幣章論者は貨幣の一職能たる法的職能、即ち法的支拂用具たる職能を強く主張し、實に之を貨幣の基本職能と看做して居るのである。

章券學說の祖述者が貨幣價值は法制の所産であつて、國家は特定の貨幣を造出し、此の章券は百『マルク』に通用すべしと宣言することによつて、また貨幣の購買力を決定するものと信ずるものとすれば、之れは全く根本的誤謬であることは勿論である。併し少くとも凡の名目的貨幣觀の祖述者が之れを主張したのではなく、例へばオットー・ハインが其の論文『章券貨幣學說辯護論』(Zur Verteidigung der Chaturtheorie des Geldes) (Jahrbücher für Nationalökonomik, Band 106, 1916) に於て之に反對したのは當然と言はねばならぬ。併し此等の章券論者も正當なる經濟理論の缺けて居るために國家が貨幣に對し爲し能ふ所、及びその爲し能ふ所によつて國家が貨幣に作用し得る所を正當に認識することが出来なかつた。例へば

オットー・ハインは『國家權力が貨幣に對して爲し能ふ所のものは、唯純宣言的なる部分に限られて居る』とのランズブルヒの主張に反對にて居る。オットー・ハインは次の如く考へて居る。

『紙幣を發行し得る所の國家は、其れ自體には無價值である該紙幣個片に法的支拂力、即ち同一名目額の貨幣債務を辨濟する能力を與ふるものである。斯る契約的貨幣債務は多數に存在し、其他國民の納稅債務も亦た度外に置かれてはならない。従て法的支拂力を以て發行せられた紙幣個片は多數人に取つて有用であることは疑を容れない。國家は此の紙幣個片を出来るだけ高く價值附けようと努め、同様に國家より之れを得たる者も之れを高へ價值附けようと努める。斯くして國家紙幣は一方に於て有用性、若しくは利用性を、他方に於て高價性を保持して居る。是れ一の物が交換取引に於て一の價格を得、之れによつて交換價值、換言すれば購買力を獲得する所の

二の豫定條件である』(G. L. H.)

茲に於て吾人は一つの確定的な、また最も老
い章券貨幣論者に於て、交換取引に於ける現實
的支拂用具の常例的な過重、全交換の大部分は
支拂によりて行はるるのではなく、單に計算に
よりて行はるる事實の全き閑却、殊に貨幣の購
買力は所得に依繫して居る事實の閑却を見出す
のである。從て余を以て之を觀れば、貨幣債務
は國家により名目價值が與えられて居る範圍に
於て貨幣を以て辨濟し得るとの貨幣の支拂用具
的職能と、其の國家的規定の強調とは誇張的で
ある。余は此の可能性が永續的に貨幣の購買力
に影響するものであるとは信じない。其の理由
は外でもない。法律的規定は國民經濟に於ける
所得關係に何等の變化を齎らさないからである
また、余の觀る所によれば、此の可能性は經驗
によりて證明されて居らない。甚しき貨幣増加
と之れに因つて起る所得の變動とに基因して物
價が騰貴する時は債權者は貨幣を以て現はされ

たる契約から損失を蒙る、即ち貸金利子の受領
者の類は之れである、但し利子家賃及地代は斯
ては之れに順應して變動するのである。茲に於
て貨幣價值を決定するのは唯、所得及び甚しき
貨幣増加に際して起る所得の變動である。併し
國家の名目價值の決定は常に純然たる宣言的の
ものであり、そして金本位なるかまた紙幣本位
なるかは問ふ所ではないのであるが、唯前者の
場合に於ては計算單位の對内購買力が對外購買
力と密接に結合せらるることゝなるのである
(之に就ては第七章參照)

國家の貨幣に對して行ふ名目價值の決定に當
つては一般交換用具、即ち抽象的一般的計算單
位に對して國家的支拂用具及び國家法制的意味
に於ける貨幣の屬性が明かに現はれる。何とな
れば國家は勿論此の名目價值本位の全體を人爲
的に無より創造することは出来ぬのであつて、
必ず在來の本位、即過去に於て完成せられたる
一般計算單位に結合せしめなければならぬから

である。國家は『茲に「ドカート」及び「クロイチエル」本位、即ち百「クロイチエル」を以て「ドカート」とす』と宣言することは出来ぬのであり、新に造出せられたる各貨幣は在來の貨幣に結合すること、即ち慣用せられ來つた一切の價格及所得の計算的基礎を形成して居た一般的計算單位に事實上結合せねばならぬ。之れは國家が金本位を布告する場合、例へば一封の金より百「ドカート」が鑄造せられねばならぬことを規定する場合に於てすら、其の性質上必要なる所である。此の場合に於て取引は即時一般計算單位たる『マルク』に換價せられ、之に據つてこの價格と所得が形成せられるであらう。

此の法的支拂用具としての貨幣の過重は其他の多數の學者に於ても觀られる。例へばヘルフエリヒは「帝國金貨は其受領者によつて其の賣らむと欲する商品として受取らるるものではなく、法律によりて保證せられて居る法的支拂用具として受取られる」と言つて居る(Ad O. S. 353)。

假りに貨幣の商品性を説明外に於ても、ヘルフエリヒの主張は貨幣流通の大多數の場合に常儀らぬことは確かである。今戦争に際して専ら紙幣のみ流通して居つて法的支拂用具の特性は愈々重大なる意味を有つ場合に於てさへも、貨幣の法的基礎を考慮する者はない。何人も全く支拂用具に就て考慮するのではなく、其の第三者より請求することの出来る所得分を考慮して居るのであり、果して法的支拂用具によつて支拂はれるか、銀行勘定の如きものによつて計算せらるるかは問ふ所ではない。結局その考慮する所は資財を以て欲望に對し何を満足し得るかに在る。そして貨幣は之れを商品と名附くることは出来ない。其の故は貨幣個所が移轉せられるのでは全然なくして、單に計算せられたる即ち現存の計算單位に於て現はされて居る所の額、即ち結句に於て所得分が移轉せられるものであるからである。

最近名目主義者ではあるが、適當に指圖學說

の代表者とも、章券學說の代表者とも稱することの出来ない若干の著者がある。何となれば彼等は此の問題に對して何等の確定的の見解を持して居らぬからである。殊にフォン・ヅキザーは之れに屬しまた或る關係に於てオットー・ハインも之れである。彼等は貨幣價值を貨幣を以て購買することの出来る物財の價值より導かむと企て、特にフォン・ヅキザーは所得は貨幣價值決定の基礎であると認識したが、實に此の點に於ては吾人の見解に接近して居るのである

(Grundriss der Sozialökonomie, Band, besondres. 301 ff.)。併し彼は未だ限界利用學者として利用と稀少性によつて決定せらるる財の絶対價值を信奉して貨幣の國民經濟的、客觀的交際價值を認めて居る(300)。是れは貨幣が一般物價によりて國民經濟的過程に於ける凡ての當事者に對し保持して居る所の通用力と定義せらる。併し其のようなことはない言ふことは吾人が嚮に詳論した所により明かであらう。フォン・ヅキザーに於ける

進歩は彼が原則に於て貨幣價值の所得に對する關係を認識したることに在るが、其の價值學說と所得も亦た原則として財の分量として現はれてふ全く嚴格なる唯物的の見解の基礎に立つたため、彼は純主觀的な個人的貨幣觀に到達して居らぬ。即ち國民經濟に關する彼の見解の全體は社會的考察を固持することによりて邪道に導かれて居る。(之れに關しては Zeitschrift für Politik Band 1159, に於ける詳細なる拙論を比較すべし)。そして真に其の名に値する程の價格理論が缺除して居つたために、貨幣本質に關して屢々正鵠に當れる彼の見解も、不明瞭となり、無根據でありいくらく見ても著るしき唯物的數量的なる體系中のまざり物たるに過ぎないのである。

(未完)